

報時丁然尔亞
錄附藝文

第拾號

第參卷



Oct. 27
de 1928

Año III
Núm. XX

Suplemento Literario
"El Argentin Dijo"

狂者の手記 (一) 七子

附記

X X 商會のM君が地方の本顧客廻りの路すがらX町の
云の働いてる店へ立寄った。
でつぷりと肥った艇を少し斜に構えて、何處も押せば斯ん
ど身が出るかと思はれる程錆のある洪い声で、斯うした職業
の人に這有亦豊富に世間話と次から次へと語り續ける酒
脱さば、この空く踏んでも一輪入商の主がものがある。(子も
奇術師 魔法壺から手繰り出す網子ボンド)と、目並を
聯想で流し入りながら、早くと快んだ私の口不重空々と来た
ら——いっは既に友達仲間との通り相場だから止むを得ん

「時上君に見せたいものがある」
M君は手鞆の中ら厚はった帳簿みたいなものを取出した。
鉛色の表紙で、版に垢滲み代物である。
「日記だよ……だが、僕のぢやない、僕らと日記を書きな
んて、賢次郎時間おんか持合はさん」
と、飛んた、必死にさうな大見得を切る。然し何んだか知れた
ものではない。その場所へなら、後生大事の筆盤の所を外しても
日参り、夜参りは仕業おんい強か看の苦だが……おんを反問でも
したら、おんは「ケチ不時間だ」とも空囁くかも知れぬ。

「徳川だ」
M君は持主の名と自分の頭とを同時に突出した。それでも私が
それと手さへ觸れたいので、押つ付ける如うに。
「君は未だ知らないか見江……徳川は狂狂したを、後世
どう……狂狂しちゃった！今では然るマニッミオの厄介者さ」
「やー、やー、いっは……」
私は三の句、次がなかった。

徳川とは二三度逢ったことがある。格別、親交も持たない私は

唯、快活な世間並の青年かと思はれた。日記でも書き留め
る様な生活に深々ある。況して狂狂もしやうな狂熱のある男
の如うにはどうして、どうして受取れるものではないか。——狂
印人中で狂狂でもするものは誰よりも先づこの自分だらう——と
おんく、自分の狂熱性を畏怖れて居り、自夏も——可笑しいが
——持つて居らうと立ち私事だ(ちよ思ましくい、どうく徳川
のに出し抜かれた)諸君も聞いて、喉を吐き出すだらう——
斯うした途方途微もない唇言を胸の中で、吸うながら、M君に
はちよいと御免を蒙って早速「吾が先駆者の手記を繰返して
見た。

何よりも先づ驚かされたのは(俺は徳川公爵だ!)といふ文句
の羅列である。……してみると此の手記を書いている頃、あいつは狂
狂に似通ったものを何處か讀んだやうだ……あいつは狂
狂人日記だ。徳川の奴、尻からゴゴリに感化してゐたのか
から、大した人間ぢやない。古来狂狂者の性情は相通してあ
るものだから、徳川に似て、あいつの独創を並べ立てたのかも知れぬ。
……して逆代的に、徳川の方が役者が一枚上かも知れぬ……
斯んなことを考へてゐたら、急に其の手記を發表して見たら、
おんが書いたものと同じ思はんもの。

「いっは、おん……」
困った揚句、私色々考へた。徳川の手記佐ふものなら、自分だ
つてお茶の子だ。例の世間で私のもので穿達(て)も作者と
して、敢て徳川を凌辱する訳でもあまじい。感達のされたからとて
私としてみても、寸毫も不腹を申しても餘地は……亦(是は極内
内の話だが)狂狂者へ附記して置けば、此の手記がどんなに不
味からうと、或はそんなじやない、おんに差障りがあらうと、
其実は氣遣ひ。徳川が一手に引受けて受取やうといふも、だ——
——どちら(驕)んでも私の損は少いよ……と、少々狡い遣り口か知らず

……と、少々狡い遣り口か知らず

話童

ピロノ王と姫

拾

小

(上)

武士道草やかなりし中世紀の頃、英雄豪傑は雲々如く各地に割拠し、鎧を削りて戦を争ふ。鎧然と鳴る鎧甲、袖、鳴り響く馬蹄、響く軍紅、カウンを夕陽に靡かせ立て、若武者に別れを惜しむ美しき乙女は、曼陀羅草の花を授けりけり。

世は戦國、御代……独り中御ヨロシに、その覇を握る佛蘭西帝國は、彼、向小所敵、勝利を告ぐる角笛の音に、全歐洲は靡き伏した。然し血は流れて、河をなせ、屍はつん山をなす血まじり、破州の天地に、いつか青葉の香が訪れて、常勝のフランス軍は、野より却て、意気揚々として凱旋する時が来た。蕭々と進む全軍には、望郷の旅喜が、あふれてゐる。

その先頭、一、わが自立つて勇ましく武者一騎、黄金を飾りたる最の甲冑に、包まれ、馬をよちたが、全軍を指揮する若き騎士は、誰より、年僅の十九才にして、全歐洲を蹂躪した佛蘭西カラモール、唯一人の王子、ピロノ、である。

彼の体軀は、戦國の勇者にしては、余り山々しく、貴公子然としていた。然し一度彼、剣が鞘を離れる時、鉄石の如く剛直した帝勝軍の名を辱しめる事があった。ピロノ王子は、優る俊傑である。矢に、一、神の如き蒼蒼は、國民として、王子を感ずる。フランス帝國の爲めならば……赤心に身も心も捧げしのである。天地四季のある如く、その中にもたへず変化がある。進軍の角笛は、どこか、牧歌と変わり、剣を、持つ手には、堅忍が抱かれた。かくして、世は、大平の海、四方の城の外、堰に、水蓮と夕陽が、赤く染めて、沈む頃、アンジェラスの鐘は、靜かに、街の隅隅まで、鳴り響く。

然し、この平和な眠りも、やがて、カールロス、マルトルと云ふ光復の都に出て、官民を苦しめはじめた頃、再び破られた。

此のとき、耳にしたまじ、ピロノは、怒り、血に飢えた剣を引、叫んだ。

「誰もある馬を引、ワッ！」

ピロノ王子は、馬を走らせ、せ身、カールロス、マルトルの住み敷を襲つた。さしもの、彼を、一、つさに、打ち倒した。剣に、血を、見せ、腕の、凍え、王子は、驚愕として、微笑を、馬を、帰へした。

その時は、世集った群衆は、「ピロノ、王子、万歳、フランス帝國万歳」と、叫んで、王子を、称へた。人民、遂に、王子に、心服して、「ピロノ」と、呼ぶは、野端の、蜘蛛、へ、懐く、走つた。

又、其頃、父王は、一頭、獅子を、非常に、愛してゐたが、王は、威朝何気なく、檻に、近づいた時、何に、驚いたか、突然、猛獣は、檻を、破つて、王に、おどりが、つた。

「父上危い！」

一声、叫んだ。王子は、素早く、猛獣に、飛びかいて、父王を、かばふ。近所、共は、た、恐れ、立騒ぐのみ……

一分、三分、五分、戰場を、幾度、血を、すった。愛剣は、遂に、さし、しもの、猛獣を、見事に、つら、殺して、しまつた。

人々は、よろこび、ほめた。えた……それにも、ま、して、帝王は、こんな、に、まだ、立派な、息子を、持つ、自分と、どんなに、幸福に、思つたか……

「ピロノ、わしは、今日から、この、佛蘭西帝國の、位を、次に、ゆづる、か、有らう！」

「父上、私は、まだ、若う、御座ます。私には、まだ、一回、を、支配する、仕、格が、御座せん！」

「なに、汝の、勇氣と、慈愛と、によつて、すれ、佛蘭西帝國は、い、か、く、して、ピロノ、王子は、佛蘭西帝國王、として、父王、カラモール、に、後を、継いだ、のである。國民は、歡喜に、祝、して、新王と、祝、した。續いて、彼は、父王の、すゝめ、を、后、に、迎へた。

少し、幾ヶ月は、故郷の、如く、す、去つた。

又、して、人間、上、に、幸福、を、い、つ、つ、でも、つ、く、も、を、な、ら、れ、は、決、して、泣、く、と、云、ふ、事、を、知、ら、ない、で、清、む、た、ら、う。然、し、人、間、の、事、業、は、弱、が、馬、よ、る、年、波、に、父、王、は、秋、日、の、立、ち、よ、る、頃、遂、に、この、世、を、去、つ、た、のである。

国王は歎き悲しんだ。それにも益して。ピロノ王の悲劇は一人
で、おごりおごり華威はいとどなされた。
彼の愛剣は父王の死を悲しむが如く夕陽に力なく曇った。
然し試練の不幸はそればかりではなく續いて又訪れた。

それは王妃の死である……
王はどんなに無情な運命を呪ったことであらう。父王の死後
いくばくもなくして再び送る愛する王妃の棺を淋しく見送る
ピロノは泣いた。

「さしも勇敢な彼も全く
力失せ苦しいなまじしい
毎日を寂しく送らねばホ
らなかつた。」

その頃、オーストリア國にフ
ロール王とよぶ英邁果敢
の王がゐた。

王妃、ブランカ、ロレルと、間に
ベルタ、姫と呼ぶ一人、美しい
王女があつた。

英雄色を帯びたことへの如く
各國の王は姫を懇望した
が、帯に短かき、褌に長
し、王は斷固として應じ
なかつた。彼女は容姿、才、美し、けり、心も亦決して
上に美し、て女であつた。

だが年頃の彼女は常に待て違ひ、各國の英雄家探の話を
きくのがなにより好きだつた。

十七、八、元會、婚だとして、王女は心裏に憂ひ、彼女に
いつも話の甲に出る、佛蘭西王、ピロノ、噂にやると人知
れず胸の高ぶりを覺へ、やむを得ず、なやまして、もどるゝだつた。



慈愛に満ちた王、美しい王、そして英雄……
彼女は常に未だ見ぬピロノの幻にやまされ、あきらま
ず、王女といふ悲しい城壁に、いつか押へられ、ねね、な
つた。

然し、ウイナスの矢は金の射、其の頃、同じく忍従の生活を
送っていたピロノ、耳にも或日ベルタ姫のうわさ、傳つた。

「氣早い王は直ちに使者を立て、
オーストリアへ立ちよせ、とつ、ロレル王
をかねてからピロノの噂、風の
便りに、よいてゐたこと、早速承
知する。」

「それ、フランカ王妃だけは一人、姫
を遠く手放す事、敢て悲しん
だ、たとへば、愛娘の幸福にな
る事とはいへ……」

「姫、ベルタ」
或日、父王から呼ばれた、姫は父の御
屋を訪れた。

「姫よ、此度、フランス王、ピロノより
致をほし、と申して、まいたわし
は、すぐ承知の、と答へた。じや
どうじや、汝は、くれさじや
う。」

「はい、父上……」
姫はかすかに答へた。そして、その顔には、紅い雲が散つた。
父王は非常なよろこんだ、それと、また、また、ベルタ姫の、よろこびは……
幻の恋は今、實現され、時が来た。

彼女も、やがて、ピロノとの、美しい生活を、思ひ、思はず、神に感謝
した。
「ピロノ、ピロノ、」彼女の、美しい夢は、彼女を、どんな、に、よろこばし
めた。

灰色の詠

(其の二) 美 都 三

世智辛い世の中に世智辛い人達が二時間の仕事を五分間で片付けやうと馳けまわす。そんな人達に灰色の話を聞いてほしいものがある。……灰色の私に聞いた話ではない。

然しそんな世智辛い世の中だけに火は熱くも水は冷たい。なんでもわがままな事を考へる奴は野暮だ。あつさり片附ける。片附けながら海本人は何時のまにか「水は熱くて火は冷たい」と信じて居る。だから素晴しいものだ。敵は心頭を滅却して……といふのはよい。

そんな世智辛い人達は「冷たい火で火傷を、熱い内にこの「灰色」話……と遠はお蔵のしんが「灰色」だった昔にはこんな話もあった。……位で私は満足する事にしよう。

マックス・リベルマンが「絵画」に於ける想像と云ふは日本の中に書いた話であるが、一人の画家が「ウツテンベルグ」の丹後にて九十五箇條を打つて、と云ふ絵を画いて見た。幾月も懸つて想像を練り、漸く草稿が練り、愈々「アール」に移つて、それを直して受ける積りで、親切な師匠が訪れて来た。先生が出来上った草稿を見せると、一度今九十九箇條を振り上げて、九十五箇條を打ちつける。群集がそれを喝采してゐると言ふ、劇的のシーンが描いてあつた。

親切な先生はその着想を賞めて、唯九十九箇條が自分だけ振上げてゐるは、程々しくても、どうも、あつた。史を動かした大事件の情、入る感じに想像を、打つ事は誰か弟子にでも、せよ、それは不可い、と云ふ意見を述べた。

忠実な弟子は早速構図を改めて、九十九箇條自身は群集に向つて演説をする。直ぐ傍にゐる弟子が鉄槌を振り上げてゐる場面を画いた。……再び親切な先生が来て、いふには「構図を改めたので、却々好くあつた。唯九十九箇條の余り近く

に鉄槌を振り上げてゐる人物が居る。絵を見る人、注意を引く。引き付けて、絵の中心である九十九箇條の重みと奪ふ。打ち手はもう一次の人物でなければならぬ。

言はれるまゝに弟子は、今一度、この構図を改めた。さうすると又見に来た師匠は、今一階、人物に打たした方が未だ一層好いと云ふ。

一月経ち二月過ぎ、いつか春が近づいて、真夏の太陽が赤々と画面の窓に透り、暖かき空気が、この世に、人物が皆一度、鉄槌を打ち、又直ぐに取上げられた。そして最後には先生は、仔細らしく鳥巢の頭を拭き、おから云ふた。

「あの九十五箇條とウツテンベルグ城外に打ちつけた時、実は世界史を動かす大事件の発端であつた。それ程の大事件である以上、偉大なる九十九箇條の、人こそ、実に、自ら鉄槌を揮ふべき人であらねばならぬ」と。

而してこの世にも忠実な弟子が、その過去半歳を費やした時如何なる感慨を、ふけたか、それはマックス・リベルマン自身も知らず、かつた。

たか免に角「灰色」話の一つである。采稿終り

和歌 拾小舟

さすらの身に今日も亦暮れゆくぬ
我身に幸のいつがぞあるらん
父を恋ひて悲しむたまりかぬ 独り淋しく
廣野をさまよふ
春立ちて川面に風のかほる夜は泣のなぐれ
むかししのぼる
さすらのかりおの 情のよほらに何敷くらん
星は 涙す
うらやみ 野辺に咲く花の名も草
秋には露の情すらなし